

## 巻 頭 言

私が理学部数学科を卒業したのは、1965年3月であった。その時は、時計台ホールで全学の卒業式があり、その後で理学部事務室の窓口で学位記を受け取ったように記憶している。学位記を受け取った後は、成り行きで幾つかのグループに分かれて、暫く語り合った後に分かれて行ったように思う。

卒業式当日は上の様であったが、私の学年は卒業を前にして先生方との懇談の時間が許されたのである。伊藤清先生が学年の世話係ともいべき友達に“卒業する前に先生方との懇談の時を持ったらどうか。先生方には私からお願いしてあげよう”という思いもかけないご提案を下された。伊藤先生と世話係りのお骨折りで、卒業式の一週間くらい前であったか、現在の205号室で先生方との懇談の時間を許された。それから既に50年余が経つが、先生方との懇談の様子は今も良く覚えている。

京大数学同窓会が発足して以来、数学教室が、同窓会の願いを受け止めて、教室独自の学位記授与式を開催してくださっている。同窓会側としては、卒業・修了して新たに会員となられる方々に同窓会を認識していただくまたとない機会であるので、数学教室に積極的に協力し、学位記授与を終えた後に細やかな懇親会を同窓会が中心になって開いている。私個人としては、卒業生・修了生と先生方との懇談の時間を大切にしたいとの思いも有る。一方では、このような行事は京大らしさに反するのではないかと危惧を感ずることでもあった。

今回の森住弘さんの寄稿文をみると、昭和29年の森住さん卒業の折は“数学教室で秋月教授から一人ひとり学位記が手渡された”とある。とすれば、現在やっているような教室独自の学位記授与式は、かつて有ったものと知ると、少々心落ち着く思いがする。いわゆる“京大数学らしさ”なるものは、見える形に求めるべきではないのかもしれない、むしろ卒業生の皆様の各所における働きの中にそれとなく共通して感じられる特徴にあるのだろうと思う。その意味で、同窓会誌にご執筆くださった皆様の活動の記録の中にこそそれが見られるのではないかと思う。

京大数学同窓会が発足して4年が経過した。活動はなお覚束ないが、この同窓会誌が会員の皆様の多様なお働きを互いに知りあう場所として役立てるよう願っている。

会長 井川 満

**追記** “楠先生に教室の絵を描いて頂けないものか”といった話が世話人たちの間で以前から出ていた。今回、思い切ってお願いしようということになり、楠先生をお訪ねした。“絵筆を擱いてからもう永いから”と渋られる先生に無理やりお引き受けていただいた。絵具も古くなって使えなくなっていたので、絵具を始め道具を新たに整えて描いて下さったのが、教室玄関の絵である。厚かましくも文章をもとお願いし、お書き下さったのは「初めての外遊をめぐって」の記事である。厚かましい人間は留まる所を知らない。更に絵をもう一枚とお願いしてお描きいただいたのが、桜咲く中庭の絵である。「数学教室の建物の変遷」の記事は、もう知る人も少ないだろうからと言ってお書きくださったものである。玄関に掛かる青銅製の銘板についても記してくださっている貴重な記録である。

楠先生に改めて謝意を表したい。